

何となく、気が乗らない人間ドックだった、七年前までは。

理由はいろいろある。時間が無い、面倒、今元気だからなどなど。要は何かが発覚して、平和な日々がかき乱されることが嫌だっただけなのである。

もし何か異常が見つかったら……そう六十代は、何が見つかったも不思議ではないお年頃なのである。へたをしたたら小さながんでも見つかった、手術されるかもしれない。幾本もの管に繋がれ、ベッドに力なく横たわる自分の姿が目に見えぬ。

いやいや、自他ともに認める健康人間のこの私が、そんなことになるわけがない。現にこれといって悪い所はなく、多少の不調は年齢的にあつて当たり前なのである。

だから人間ドックなんて、受ける必要がない。第一検査を強いる権利は、誰にもないのである。だつて私の命だもの。好きにさせて、放つておいて！と内心でつぶやくも、しゃあない……あきらめて予約を入れる。

だがそんなしぼしぼといった態度が一変する出来事が起こった。へたすると、が現実になったのである。検査が終了し、結果の報告を聞くとき、人間ドックの医師は肺のレントゲン写真を見ながらこう言った。

「ここに小さな結節が見られます。大きな病院で至急、精密検査を受けてください。腫瘍の疑いがあります」

腫瘍？私はまだ、ぼかんと聞いていた。お酒も煙草もたしなまない、風邪もひかない、寝込んだこともない私にそんなものが？

それはまさに、青天の霹靂だった。何せ病院とは縁がなかったもので、全てが初体験なのである。検査だけで、疲労困憊。

結果、肺がんと判明し、師走に手術。そして術後の病理検査で、私のガンが極めて悪性の生存率の低いガンであることを知らされる。いわゆる希少ガン。本当に何から何まで異例尽くだった。私の自信は、過信に過ぎなかったのである。私の病気は自分だけでなく、家族も振り回した。

だが周囲の心配をよそに、私は奇跡的に回復していった。そして定期的に検査を受け続け、あわたたくし日を送っているうちに、気がつけば五年以上が過ぎていた。

二〇二二年二月十七日。総合予約票の用紙に、診察終了の判子が黒々と押される。晴れがましい卒業証書である。

その半年後、だいたいようぶだと思つたが、また人間ドックを受けた。同じように検査が終わつてから、結果説明を聞く。先生は順番に指で課目をなぞりながら説明していたが、肺の箇所でぴたりと止まった。既往症の欄に関心を示したのだ。

「肺のどんなガン？」

私が病名を告げると、先生は驚きの色を隠さなかった。これまでの医者も皆一様に目を丸くしていたので慣れているが、今回の先生のように根掘り葉掘り尋ねてくるのは初めてだった。肺の専門医だったのかもしれない。

「最初はどこでわかつたの？」

「この人間ドックで見つけてもらいました」

「あれはすぐに広がるからね。早期の手術が功を奏したんでしょね。よかつたですね」

先生は何度も感心していた。私はあの時のことを思い出して、改めて自分の生存率の低いガンから生き延びたことを実感する。

病気になる、気づいたことがあつた。自分の命は、決して自分だけのものではないということである。私一人の命のために、家族や友人をはじめ、病院の幾人もの先生や看護師さん、そして病院で働いている方々など多くの人のお世話になつたのである。

病気になるということとは、そういうことである。決して自分だけの問題ではなかつた。

もし人間ドックを受診しなかつたら、私はどうなつていただろう。今は元氣だと言つても、自覚がないまま進行していく病気だつて多いのだ。それらを未然に防ぐ、それがいかに大事かということ、私は身をもって知つたのである。

自分で責任を取ると言つても、取れないのが病気なのだ。命拾ひしたといつても、拾つたのは自分ではなかつた。人間ドックを受けたことで、私の命はリレーのように多くの人々の手で助けられたのである。人間ドックは第一走者だつた。

幸い、私は今も元気に過ごしている。しかし油断は禁物と心得ている。これまで毎回うとうとしく思つていた人間ドックも、今では進んで受ける気持ちになつた。何しろたつた半日の受診で将来の安心が得られるのだから、ありがたいという他ない。それは自分だけの安心ではなかつた。

それからは毎年、一年の成績表をもらうような気持ちで臨んでいる。赤点を取らないよう、がんばらなければ。